主日礼拝説教「これは多くの人のため」

日本基督教団石神井教会　2018年9月16日

【旧約聖書日課】出エジプト記　12章21～27節

21モーセは、イスラエルの長老をすべて呼び寄せ、彼らに命じた。

「さあ、家族ごとに羊を取り、過越の犠牲を屠りなさい。22そして、一束のヒソプを取り、鉢の中の血に浸し、鴨居と入り口の二本の柱に鉢の中の血を塗りなさい。翌朝までだれも家の入り口から出てはならない。23主がエジプト人を撃つために巡るとき、鴨居と二本の柱に塗られた血を御覧になって、その入り口を過ぎ越される。滅ぼす者が家に入って、あなたたちを撃つことがないためである。

24あなたたちはこのことを、あなたと子孫のための定めとして、永遠に守らねばならない。25また、主が約束されたとおりあなたたちに与えられる土地に入ったとき、この儀式を守らねばならない。26また、あなたたちの子供が、『この儀式にはどういう意味があるのですか』と尋ねるときは、27こう答えなさい。『これが主の過越の犠牲である。主がエジプト人を撃たれたとき、エジプトにいたイスラエルの人々の家を過ぎ越し、我々の家を救われたのである』と。」

民はひれ伏して礼拝した。

【使徒書日課】ヘブライ人への手紙　9章23～28節

23このように、天にあるものの写しは、これらのものによって清められねばならないのですが、天にあるもの自体は、これらよりもまさったいけにえによって、清められねばなりません。24なぜならキリストは、まことのものの写しにすぎない、人間の手で造られた聖所にではなく、天そのものに入り、今やわたしたちのために神の御前に現れてくださったからです。25また、キリストがそうなさったのは、大祭司が年ごとに自分のものでない血を携えて聖所に入るように、度々御自身をお献げになるためではありません。26もしそうだとすれば、天地創造の時から度々苦しまねばならなかったはずです。ところが実際は、世の終わりにただ一度、御自身をいけにえとして献げて罪を取り去るために、現れてくださいました。27また、人間にはただ一度死ぬことと、その後に裁きを受けることが定まっているように、28キリストも、多くの人の罪を負うためにただ一度身を献げられた後、二度目には、罪を負うためではなく、御自分を待望している人たちに、救いをもたらすために現れてくださるのです。

【福音書日課】マルコによる福音書　14章10～25節

10十二人の一人イスカリオテのユダは、イエスを引き渡そうとして、祭司長たちのところへ出かけて行った。11彼らはそれを聞いて喜び、金を与える約束をした。そこでユダは、どうすれば折よくイエスを引き渡せるかとねらっていた。

12除酵祭の第一日、すなわち過越の小羊を屠る日、弟子たちがイエスに、「過越の食事をなさるのに、どこへ行って用意いたしましょうか」と言った。13そこで、イエスは次のように言って、二人の弟子を使いに出された。「都へ行きなさい。すると、水がめを運んでいる男に出会う。その人について行きなさい。14その人が入って行く家の主人にはこう言いなさい。『先生が、「弟子たちと一緒に過越の食事をするわたしの部屋はどこか」と言っています。』15すると、席が整って用意のできた二階の広間を見せてくれるから、そこにわたしたちのために準備をしておきなさい。」16弟子たちは出かけて都に行ってみると、イエスが言われたとおりだったので、過越の食事を準備した。17夕方になると、イエスは十二人と一緒にそこへ行かれた。18一同が席に着いて食事をしているとき、イエスは

言われた。「はっきり言っておくが、あなたがたのうちの一人で、わたしと一緒に食事をしている者が、わたしを裏切ろうとしている。」[19]弟子たちは心を痛めて、「まさかわたしのことでは」と代わる代わる言い始めた。[20]イエスは言われた。「十二人のうちの一人で、わたしと一緒に鉢に食べ物を浸している者がそれだ。[21]人の子は、聖書に書いてあるとおりに、去って行く。だが、人の子を裏切るその者は不幸だ。生まれなかった方が、その者のためによかった。」

[22]一同が食事をしているとき、イエスはパンを取り、賛美の祈りを唱えて、それを裂き、弟子たちに与えて言われた。「取りなさい。これはわたしの体である。」[23]また、杯を取り、感謝の祈りを唱えて、彼らにお渡しになった。彼らは皆その杯から飲んだ。[24]そして、イエスは言われた。「これは、多くの人のために流されるわたしの血、契約の血である。[25]はっきり言っておく。神の国で新たに飲むその日まで、ぶどうの実から作ったものを飲むことはもう決してあるまい。」

受け継ぐもの

わたしたちの教会では、今年度の大きな課題として、子どもたちのためのプログラムをこれからどのようにしていくべきかを問い直し、歩み直そうとしています。すでに「教会学校」の名称を「こどもの教会」とし、運営体制も見直して、半年近くを試行錯誤してきましたが、今月末には外部講師をお迎えして、あらためて「教会教育」や「こどもプログラム」についての基本的な学びを共にする研修の機会を設けました。わたしたちがそのような課題に取り組むのは、もちろん、ただ「子ども向け」の行事をどのように工夫したら喜んでもらえるかということを考えているからではありません。わたしたち教会が、先達から受け継いできたものを如何にして次の世代に受け渡していくのか。そもそも、何を受け継ぎ、渡そうとしているのか。そのことに自覚的に目を向けて、わたしたちの教会としてできること、優先すべきことを、明らかにしようとしているのです。

その意味では、わたしたちの取り組むこの課題は、ただ「子どもたち」に目を向けているだけのことではありません。むしろ、教会の中の先輩方、ご高齢の皆さんに目を向けていることだと言ってもよいと思います。わたしたちの信仰の営みの多くは、そのほとんどは、先達・先人から受け継いだものに拠っているからです。それは、わたしたち各自の中から自然に湧いてきたものではありません。わたしたちは皆、祈りの言葉も、礼拝の作法も、先達に倣って身に着けてきました。わたしたちが「神の言葉」として聴く「聖書」さえ、先達から受け継いできたものです。もちろん、「聖書」の中でも「新約聖書」は、わたしたちが主と信じて従うイエス・キリストの御教えやお働きについて書かれているものです。わたしたちは、「新約聖書」を開けば、主イエスの御教えを直接聞き、またそのお働きを直接見ることができるように思っているかもしれません。けれども、それもまた、主イエスの弟子たちから始まる先達らによって受け継がれてきたものであるのは明らかです。先達を通して受け渡されてきたものを、わたしたちは、主イエスからのものとして受けとめて聞き、また見ているのです。

先達から受け継いだものを、次の者に受け渡す。その営みの中でこそ、教会の子どもたちは、信仰へと、また信仰者の人生へと、導かれていくのです。

「贖罪日」のとりなし

教会が主日ごとに執り行う礼拝は、そのような、受け継いできたものに満ちています。残念なことに、日本のプロテスタント教会の多くは、二千年の教会の歴史の中で受け継いできていた事柄のかなり多くのものを、途中で置き忘れてきてしまったと言われています。19 世紀に北米から渡って来た宣教師たちが、伝道地の日本にすべてを伝えなかったためです。それでも、わたしたちは、そのように置き忘れてきたものを、完全に失ってしまうわけではありません。世界中に広がる教会の交わりの中で、失われていたものを取り戻すこともできるのです。たとえば、わたしたちの教会では、礼拝の冒頭で「詩編 51 編」を用いて「罪の告白」を共に唱えるということをしています。近年は、わたしたちの属する日本基督教団の多くの教会で、「罪の告白」として位置づけられる言葉や祈りが、礼拝の冒頭に置かれるようになっていますが、半世紀前には、それを礼拝に取り入れている教会はきわめて少なかったのです。

罪を告白し、悔い改めて赦しを願う。それは、わたしたちが、神の御前に進み出るにあたっての、最初の一歩です。主イエスは、宣教の初めに「**時は満ち、神の国は近づいた。悔い改めて福音を信じなさい**」（マルコ 1:15）と告げられました。悔い改めは、主イエスがわたしたちに求めていらっしゃることですし、それは、わたしたちが生涯かけて取り組むことでもあります。もちろん、「悔い改め」は、主イエスが初めてお教えになられたわけではありません。主イエスに洗礼を授けた洗礼者ヨハネもまた、悔い改めを宣べ伝えていた人でした。そもそも、主イエスや洗礼者ヨハネが生まれ育ったユダヤ教の中で、「悔い改め」は大切な要素として受け継がれていたのです。

ユダヤ教の暦（陰暦）では、今週、「贖罪日（ヨム・キプール）」という特別な一日を迎えます。それは、もともと、レビ記 16 章などで定められているもので、今日の使徒書日課（ヘブライ人への手紙）が「**大祭司が年ごとに…血を携えて聖所に入る**」と触れていることです。その昔、幕屋や神殿で祭司が礼拝を執り行っていた時代、贖罪日を迎えると、大祭司は一人、神殿の一番奥にある「至聖所」に入り、定められた犠牲の血を振りまきながら、その一年にイスラエルの民が犯したすべての罪の赦しを神に願う祈りをささげました。神殿の外で待つ民は、その間、各自罪を告白し悔い改めて過ごしたのです。神殿が失われ、大祭司が贖罪の犠牲をささげなくなった後にも、ユダヤ教徒は、「贖罪日」に断食をして過ごし、シナゴーグで一年の罪の赦しを願う特別な祈りをささげてきました。今日でも、「贖罪日」はユダヤ人にとってもっとも神聖な一日だとされているのです。

わたしたちの悔い改めは、どれだけ真摯なものかと思います。決まった言葉を繰り返しているだけになっているかもしれません。だからこそ、悔い改めには、大祭司のささげたようなとりなしの助けが必要です。教会は、主日の共同の礼拝の営みの中で、とりなし祈ります。それによって一人ひとりの悔い改めの祈りを助けるのです。しかし、それは、もちろん、教会の頭である主イエス・キリストのとりなしを土台としているのです。

多くの人のためにこそ

ヘブライ書は教えています、地上の大祭司が為していたことは「**天にあるものの写し**」にすぎない、けれども、キリストは、「**天そのものに入り**」、まことのとりなしをなしてくださった、と。しかも、それは、ご自身の血を犠牲として献げてくださることによって為された、多くの人、すべての人の罪を贖うためのことだった、と。ここで言われていることは、主イエスの十字架の死のことだと、わたしたちは、知っています。キリストは、わたしたちすべての者の罪を負うために、ご自身を犠牲として献げてくださって、十字架に赴かれたのです。

福音書日課（マルコ福音書）は、主イエスが十字架に架けられる前日に弟子たちと共にされた「過越の食事」の場面です。「過越」は、イスラエルの民の先祖がエジプトから導き出される夜、神がエジプトを襲わせた「初子の災い」を、イスラエルの民だけは逃れさせるために与えられた「しるし」でした。エジプト中の「初子」が一晩で撃たれる中、「過越」のしるしとして犠牲の小羊の血を戸口に塗ったイスラエルの家の人々は、「初子」を撃たれることなく、災いの襲う中をエジプトから逃れ出ることができたのです。主イエスは、弟子たちと共に、その「過越」を記念して祝う食事を共になさり、最後の晩餐となさいました。それは、ご自身がまもなく犠牲の小羊のように引かれて行き、十字架につけられていくことの意味を、弟子たちに記憶させ、記念させ続けるためのものでした。「過越の小羊」もまた、キリストの一回限りの十字架の犠牲で、完成された。そう、弟子たちの教会は信じ、主の晩餐を記念し続けてきたのです。

キリストが為してくださったことは、「**天そのもの**」の出来事です。大祭司やイスラエルの民、またわたしたち教会の群れが地上で為すことは、「**天にあるものの写し**」に過ぎないかもしれません。けれども、「天にあるものの写し」に過ぎない地上の営みの中に、「天そのもの」であるキリストが、かつておいでくださった、今もおいでくださっている、またおいでくださる、のです。それが、「教会」です。「キリストの教会」です。キリストが、ご自身の命にあずからせるために、ご自身とわたしたちすべての者を一つにするために、洗礼と主の晩餐（聖餐）のしるしをもって弟子たちに託してくださった「教会」に、わたしたちも招かれ、導かれ、加えられてきました。

先達から受け渡されてきた「キリスト」の営みを、わたしたちも、次の者に受け継いでいくのです。それは、ただ古いものを大切にしようという郷愁ではありません。まことに新しいもの、「天そのもの」であることに、わたしたちだけでなく、すべての人が、子どもたちが皆、あずかるようになるためです。

わたしたちは皆、罪の中に生きています。福音書に描かれるイスカリオテのユダだけではない。皆が、無意識のうちに、尊ぶべきものを人の手に渡し、死に渡す手助けをしているのです。それを避けることはできません。だからこそ、主は、その罪を贖ってくださった。わたしたちが罪を告白し、悔い改めに導かれるように、新しい、罪の支配から自由にされた人として生きるようにと、招いてくださっている。わたしたちは、教会は、その御業の営みを受け渡す器なのです。